



Working Paper

大学側にとっての JICA 開発大学院連携・留学生事業の意義と課題[#]

Significance and Issues of JICA Development Studies Program and International Graduate Programs for Universities

野村 久子¹⁾・稲村 次郎²⁾

Hisako Nomura¹⁾, Jiro Inamura²⁾

1) 九州大学大学院農学研究院

2) 九州大学国際交流推進室

1) Faculty of Agriculture, Kyushu University

2) Office for the Planning and Coordination of International Affairs (OPCIA), Kyushu University

論文受付 2020 年 2 月 4 日 掲載決定 2020 年 2 月 15 日

要旨

本稿では、2018 年度に開始した九州大学の開発大学院連携プログラム体制及び実施体制、そして履修の全体像を報告したのち、留学生事業と JICA 開発大学院を行うことの大学側にとっての連携の意義と課題を挙げた。JICA 開発大学院を行う意義として、日本の現場あるいは日本の体験について体系的に学ぶ場を提供できることを指摘した。そして、座学と実施見学を通じて実問題を題材に体系的に学ぶことにより日本-留学生母国の国際協力のベクトルを共有する留学生を育成できるメリットがある。また、日本人と外国人学生のクラスシェアを通じ活性ある学びなどを取り入れるなど工夫次第で、日本の発展の歴史を理解し、英語により広く内外に説明できる日本人学生のグローバル人材育成や、地元の課題解決につなげる地方創生にも寄与すると考えられる。課題としては、成果を有機的につなげていくためにも長期的な視点での評価を行う見当が必要である。

キーワード：JICA 開発大学院連携プログラム、人材育成、クラスシェア、日本を知るためのプログラム

.....

Abstract. This paper summarizes the presentations at the JICA-JISNAS Forum held at Tokyo JICA Research Institute on Wednesday, December 11, 2019. In this paper, we report the Kyushu University's JICA-Development Studies Program (JICA-DSP) and its implementation system, the overview of the courses taken, and the students' evaluation of this year's courses. It points out that the significance of conducting a JICA-DSP is to provide a place to systematically learn from the workplaces in Japan and from Japanese experience. This has the advantage of fostering international students who share the vector of international cooperation between Japan and the international student's home country by systematically learning actual issues through lectures and field visits. Also, it is thought to contribute to regional revitalization as well as global human resource development of Japanese students who can understand the history of Japan's development and be able to explain widely in English. It also points out that the necessity to evaluate the program from a long-term perspective.

Key words: JICA Development Studies Program, human resource development, class share, Understanding Japan Program

.....

[#] 本稿は、2019 年 12 月 11 日（水）に東京 JICA 研究所にて行われた JICA-JISNAS フォーラムでの同タイトルでの発表をまとめたものである。

1. はじめに¹⁾

開発大学院連携プログラム（JICA-DSP）とは、近代日本の発展・開発の歴史は、現在の開発途上国の発展に資するとの考えの下、JICA留学生に対し、専門分野の知識のみならず、日本の開発の経験・知見を提供する「開発大学院連携構想」のもとに各大学で提供されるプログラムである。九州大学は、JICAとの連携の下、2018年度後期から学内3学府（法学府、工学府、生物資源環境科学府）が当該プログラムの趣旨に沿った科目群を企画し、「開発大学院科目」として、順次、英語による講義を開始した。さらに、2019年10月からは、3学府に加え人文科学府が参画し、人文学部コースの一部を含め、4学府が英語による科目群を提供する『日本を知るためのプログラム「Understanding Japan」』を、広く全学府の日本語コースと国際コースの院生を対象にして新設、開講している²⁾。本プログラムは、各学府の学位課程で実施する専門分野の教育・研究に加え、欧米とは異なる「日本の近代の開発経験（科学技術と社会発展の歴史的過程等）」や「戦後の援助実施国としての知見」を学ぶ講義の提供により、体系的に日本の発展の歴史を理解するとともに、さらに異文化に対する理解を深化させる機会を学生に与えることを目的としている。

また、九大では本大プログラムを全学的なものとして位置づけている。海外での活動を目指す日本人学生にも提供することにより、日本の発展の歴史を理解し、英語により広く内外に説明できる日本人学生のグローバル人材育成や、地元の課題解決につなげる地方創生に

も寄与すると考えられる。よって、本プログラムは、日本人と外国人学生のクラスシェアを通じ活性ある学びなど、本学のグローバル人材育成にも寄与する。

2. 実施体制

実施体制は、人文科学府を主幹部局（プログラム運営部局）とし、法学府、工学府、生物資源環境科学府を含む4学府の協働プログラムとして「JICA開発大学院連携構想」の趣旨・目的に沿った複数の授業を提供、『開発大学院科目』として開講している（図2）。具体的には、人文科学府が、プログラムへの履修状況の把握、修了の認定や修了証発行等を行う。学生個人の成績管理については、当該学生が在籍する各学府の学務担当係が、当該学府の規則に則り修学管理を行い、関連する学府プログラムに加え、全学的な取り組みとして実施する。また、本プログラムの運営に関し、国際部もJICAとの協議、契約等、包括的な支援を行うとともに、国際交流推進室、人文科学府、関係部局代表から構成する、「日本を知るためのプログラム」運営委員会を開催し、プログラムの方向性の検討や関係部局との調整を行う。

また、履修のイメージとして、法学府、工学府、生物資源環境科学府の学生は所属する学府・専攻の学生は、履修要件内の開大科目2ないし3科目を履修することで、開大プログラムの修了要件を満たすが、他学府の開大科目を履修することも可能とする。3学府以外の学生は、人文科学府・他の学府が開大プログラムとして設定した科目を2、3科目履修し、開大の修了

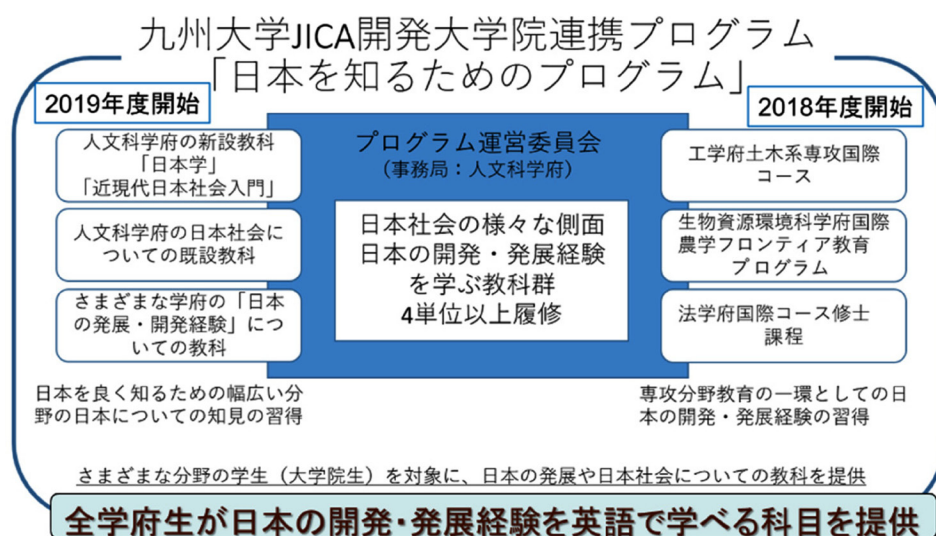


図1 九州大学JICA開発大学院連携プログラム

日本を知るためのプログラム実施体制（案）

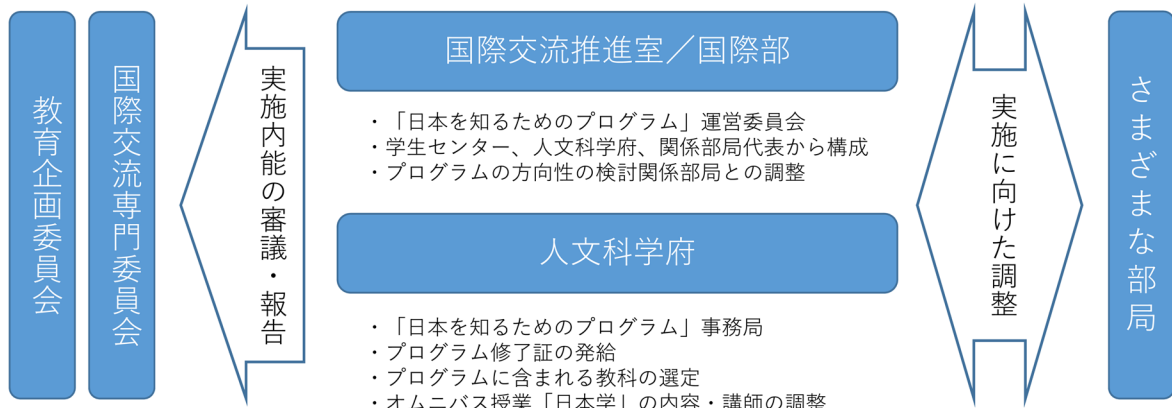


図2 「日本を知るためのプログラム」実施体制

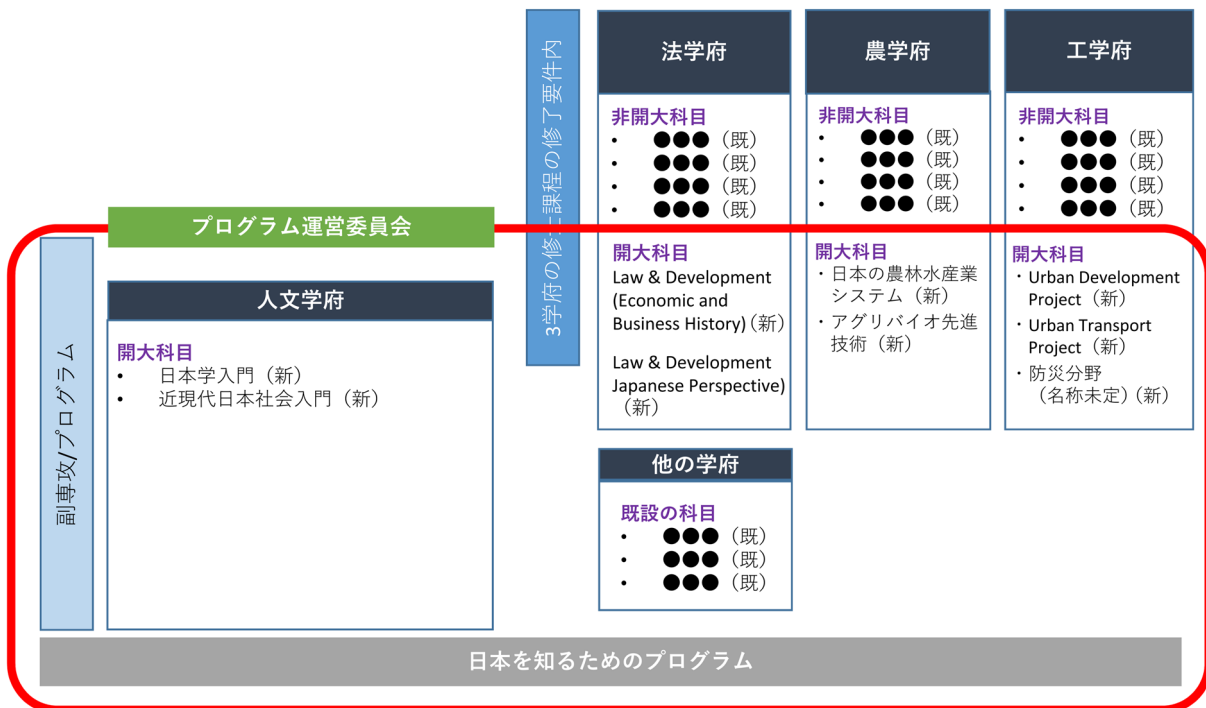


図3 JICA-DSP履修のイメージ

要件を満たす（図3）。各学府で開講される科目は専門に関連した科学技術と社会発展の歴史的過程を多面的に教授するデザインとなっている。農学研究院の生物資源環境科学府の提供する科目群は2科目で、科学技術を中心とした「アグリバイオ先進技術と国際貢献」と政策や制度、組織体制などを中心に学ぶ「農林水産業システム構築の歴史とアジア農業開発」で構成されている。

また、新たに開講される「日本学I」、「日本学II」実施内容としては、古代から近現代にかけての歴史、芸術、文学、科学史などの幅広いトピックについて、オムニ

バス形式で講義を行う。特に明治期以降の近代化にかかわる社会や法の整備、経済基盤、科学技術の導入と応用、インフラ整備、教育制度と人材育成などに重点を置いている。

3. 留学生事業とJICA-DSPを行うことの大学側にとっての連携の意義

次に、留学生事業とJICA 開発大学院プログラム（JICA-DSP）を行うことの大学側にとっての連携の意義と課題を挙げていきたい。まず留学生事業では、留

学生は主に2つのグループに分けられる。1つ目は、日本でのラボ実験中心のグループ、そして2つ目は、母国でのフィールド調査中心のグループである。いずれも、日本の現場を知ることは受入れ研究室の先生方に委ねられている。ここで、2019年10月20日に行われた農学研究院100周年記念講演でのVo Ton Xuan博士の言葉を借りて、留学生の置かれている状況を示したい。Vo Ton Xuan博士は、九大農学研究科において育種学の分野で1975年に九州大学農学博士を授与された後、ベトナム・カントー大学へ戻り、戦後のベトナムにおける農業の振興と持続的な生産に関してご尽力され、1993年にはその功績に対してアジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を受賞されている九大農学部卒の卒業生である。彼の言葉をそのまま記載する。

“Getting away from this great country without getting to know the events outside of our academic goals must be a shortfall. I thought that if I want to know how to apply what I learn from Japan under Vietnam conditions, then I must recognize the conditions that affect the Japanese people at the time they did it.”

Vo Ton Xuan博士は、日本の歴史と開発の軌跡、その背景にある法律や制度、あるいは生産現場を知ること、育種技術研究の目的であるコメの増産の技術を生産現場に普及すること、また市場につなげることの重要性に気付き、ベトナムでも技術普及につなげるために普及員の育成や農業振興のための組織を作ることによって専念された。日本に留学に来る留学生は先端技術を学ぶのみで、母国の現場を知らない場合も多い。そのような中で、日本の経験と現場を学ぶことで技術を現場で生かす知見を深めることは大事なことである。よって、JICA-DSPを行う意義としては、これまで受入れ

研究室の先生方に委ねられていた部分である日本の現場あるいは日本の発展体験からの知見を学ぶ場を体系的に提供できることにあると考える。また、座学と実施見学を通じて実問題を題材に体系的に学ぶことで日本-留学生母国の国際協力のベクトルを共有する留学生を育成できる長期的な視野に立ったメリットがあると考えられる。

それでは、九大農学研究院の学府コース生物資源環境科学府の提供する2科目について、講義などの具体的な内容に触れて、座学と実施見学を通じて実問題を題材に体系的に学ぶ工夫についての紹介をしたい。まず、科学技術を中心とした「アグリバイオ先進技術と国際貢献」では、明治以降からの農業の発展を、科学技術的視点から展開する。そして、戦後急速に発展しているアグリバイオ技術におけるイノベーションにも言及して系統的に学べるように講義を準備している。また、日本の農業分野は、戦後、新技術の発展だけでなく、農業経営方法の変化、流通機構の改良、企業の農業への参入など産業構造の変化が大きい。そこで、政策や制度、組織体制などを中心に学ぶ「農林水産業システム構築の歴史とアジア農業開発」では、社会開発領域(農業経済)の観点から日本の開発経験と途上国の今後の課題について体系的に学べるようにしている。

ここで、学生の授業後の評価をグラフにまとめたものを示す(図4)。「JICA-DSP科目で扱うテーマ」、「教員の準備度」、「講義の質」、「講義の難易度」、「コミュニケーション」、「知識の享受」、「研修先」の7つの項目で質問を行った。結果、総じて大変満足あるいは満足、あるいは、問題ない、ほとんど問題ないという結果が出た。一方で、知識の享受については、専門科目とは異なるため、それぞれの研究分野で行っているような専門的知識の提供よりも、政策的含意やそこから得ら

表1 九州大学生物資源環境科学府のJICA-DSP講義の目的と概要

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容及び授業計画	単位数
選択	アグリバイオ先進技術と国際貢献 AgriBio Advanced Technology and International Contribution	I 品種改良、特に稲の開発の歴史や栽培技術の発達 II 農業機械や利水関連技術、土壌改良技術の発達 III 食品加工技術や流通システムの発展 IV 先進技術の開発の歴史と具体的なアジア諸国への国際貢献	2
選択	農林水産業システム構築の歴史とアジア農業開発 Construction of Agriculture, Forestry and Development of Asian Agriculture	I 戦後の農地改革、その後の農業の制度や構造の変遷 II 日本農業の市場制度の成り立ちや農業強化のための経営戦略の変化 III 低資源国として循環型農業の推進・発展 IV 途上国への農業市場形成支援	2

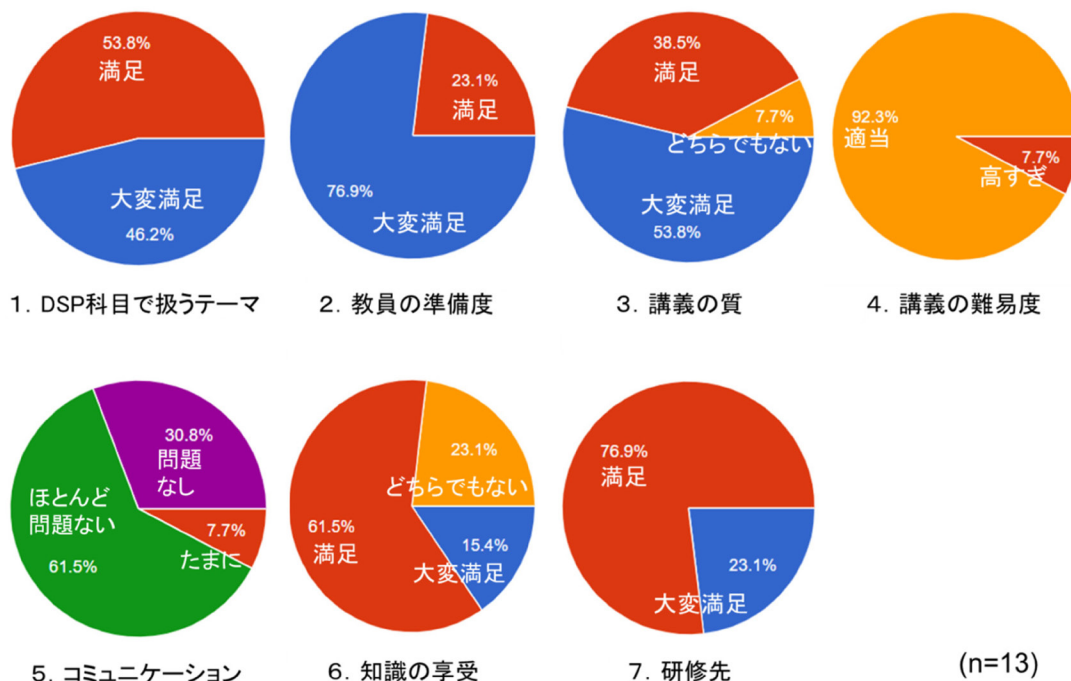


図4 学生によるJICA-DSP評価アンケート

れる課題や教訓などから理解を深められるように努めたため、専門性のある知識の享受はそれほど得られないと回答した学生が多かったように思う。コミュニケーションは、農協や工場など現場で広いエリアを移動する場合、あるいは狭い酒蔵などで一列になって見学を行うため、今後は、通訳を視察用のマイクとイヤホンを通じてより双方向でコミュニケーションがとれるように工夫したいと考える。

最後に、JICA-DSPを行う上での課題をいくつか挙げていきたい。まず、課題を成果を有機的につなげていくためには長期的な視点での評価が必要であるということが課題として挙げられる。また、これはJICAのみでなく、大学としても考える必要がある。プログラムの評価に用いる指標について、どのような指標をもってプログラムの成果とするか今後大学側とJICAが話し合っていく必要があるだろう。

また、円滑な運営には、事務体制が不可欠だが、開大プログラムは、具体的な運営については、既存の学府事務が担うことになっており、事務経費が付かない。そのため、新たな事務体制は、一般プログラム(イノベティブアジアやAgri-Net)の修学支援費で対応する必要がある。しかし、留学生事業プログラムによって、修学支援の有無があり、JICA-DSPを含む研究・教育支援体制にばらつきがでるため、修学支援については統一されることが望ましい。

最後に

JICA-DSPの授業科目を設置する大学・研究科等を持つパートナー大学(覚書締結済大学)は2020年1月20日時点で82大学となった。現在、日本の農業・農村開発の経験について、講義モジュールと講義教材の作成も進められている。その中では、失敗も含めて学びとして紹介されていくことが望ましい。そこから学生自らが関心を持ち、自国に生かすようにつなげてほしいと考える。総じて、JICA-DSPは、デメリットよりもメリットが大きいと考える。全学的なものとして位置づけ、海外での活動を目指す日本人学生にも提供することにより、日本人と外国人学生のクラスシェアを通じ活性ある学びなどを取り入れるなどの工夫次第で、日本の発展の歴史を理解し、英語により広く内外に説明できる日本人学生のグローバル人材育成や、地元の課題解決につなげる地方創生にも寄与すると考えられる。

引用文献

- 1) 野村久子「大学側にとってのJICA開発大学院連携・留学生事業の意義と課題」2019年12月11日(水), JICA-JISNASフォーラム, 東京JICA研究所.
- 2) 大学院人文科学府/国際部「日本を知るためのプログラム『Understanding Japan』の開講について」2019年9月11日, 教育企画委員会資料.